

新羅王京の都市計画成立と発展

朴 方龍

国立慶州博物館

序言

新羅は、紀元前57年に慶州に土台を作って以来、日毎に発展し、7世紀中・後半に高句麗・百済を征服して統一国家を形成した935年までの992年間存続した。高句麗と百済の都城は統一新羅へ併合された過程で甚だしく毀損されただけでなく、何回も都城を移転したので当時の都市構造等を把握するには困難な点が多い。これに比べて、新羅の都城である慶州は、統一後、一層発展して高麗へ繋がり、東京という名前で温存された。従って韓国古代の都城（都市）遺蹟を考察するためには慶州は重要な位置を占めていると言えるだろう。

韓国では首都を指称する時、‘京’と表記することもあるが、昔は‘ソウル’と呼称し、現在も大韓民国の首都を‘ソウル’と呼んでいる。これは新羅初期の慶州地域を‘徐羅伐’・‘徐伐’と呼んだことに由来し、三国時代には‘金城’と漢字で表記した。統一新羅時代からは‘金城’の代わりに‘金京’・‘大京’と漢字で表記して一般的には‘大きなソウル’と呼んでいたのが各種文献と金石文に現れている。

I 慶州の地勢と範囲

慶州は、新羅がここで建国してから滅亡するまでの約千年間、都邑を定めたところとして現在の慶州市の面積13,284km²に該当する地域である。

兄山江構造谷と永川～慶州間の構造谷、そして、慶州～梁山間の構造谷が交叉する地点に形成された浸蝕盆地として、太白山脈の支脈が南北に長く伸び、東西の境界をなしている。慶州盆地を囲んでいる内山としては、東側に明活山（245m）と狼山（104m）、南側に金鰲山（468m）、そして、西南側に望星山（226m）と碧桃山（424m）、西側に仙桃山（380m）と玉女峰（214m）、北側に小金剛山（143m）がある。兄山江の上流である麟川が西川へ流れ込み、蚊川また月城を囲んだ後、西川へ、そして、東側から西側の端へ市街地の中心を貫通している閼川も西川と合流して兄山江の本流を成し、迎日湾に流れる地形を成している。このため、全体的な地勢は東高西低の地形をなした盆地である。こういう現在の慶州の地勢は、新羅時代から大きく変化していないと思われる。ただし、周辺山地の土砂が浸蝕して堆積され、平均30cm～40cm程度の厚さで覆い被されていることだけは異なっている。従って坊制の痕跡を調べられるのは北川で、南側地域に該当し、その以北は北川の氾濫で流失し、その痕跡を見つけにくい。1917年に製作された地籍図によれば北川の範囲が相当広く現れており、南川と西川はその東側が高く、一部区間を除外すれば温存されているのが実情である。慶州工業高等学校附近にあった興輪寺址とここに隣接した永興寺は、火災で建物が焼失された記録はあるが水害を受けた記録はない。しかし、北川は、阿達羅尼師今7年（160）4月と炤知王18年（496）夏4

月、洪水のために住民が漂流したという『三国史記』の記録があり、伊湊金周元が急な洪水のため、北川を渡ることができなかつたので、国王にならなかつた等の記録もある。その後、北川の氾濫は高麗時代と朝鮮時代にも三南の壮丁を動員して堤防を積んだ記録が閼川改修碑と関係文獻に現れており、北川の氾濫が度々あつたことが窺える。それにもかかわらず、北川下流以北に隣接した地域は段々人口が増え、8世紀～9世紀以後は住居地域に変わり、都市計画が部分的に実施されたと思われる。実際に北川以北地域である東川洞友邦アパート新築敷地一帯の発掘調査で都市計画の痕跡が発見された。発掘調査時に現れた東西道路、南北道路は広さ6m内外で前代に比べて規模が小さく、出土した瓦当や土器からみて8世紀～9世紀以後のものと推定されたことがこうした事実を裏付けている。このように北側は1次に地割が行われた当時は除外されたが、8世紀～9世紀以後には東川洞友邦アパート敷地附近まで都市計画の範囲内に入っていた。

東側は狼山附近または明活山付近まで地割が行われたと言われているが、実際に地図上には普門寺址まで痕跡が残っている。西側は西川が境界になって、その以西は痕跡がなく、南側は南山の北側の麓までとみなす、一致した見解がある。南西側は五陵附近、三陵の前のドイビパツル上部までとみなす見解もあり、鮑石亭を境界にして北側、東南側は望徳寺址と神文王陵以北まで都市計画の痕跡が残っている。

II 道路遺構と都市計画の成立時期

新羅王京に坊制(条坊制)が実施されたことはよく知られている事実だが、その時期については明確ではない。しかし、次の文獻を通じて、ある程度推測が可能になる。

『三国史記』3卷新羅本紀3、炤知王9年(487)条には

‘。。。三月。始置四方郵駅。命所司修理官道。。。’とあり、新羅で道路築造(交通)と関係した記録がある。

そして、同書同卷慈悲王12年(469)条には

‘春正月。定京都坊里名。。。’という2つの記録より、炤知王9年(487)以前に既に道路が存在したことがわかる。道路の区画がなくては、慈悲王12年(469)に坊里名を定められない。従って、遅くとも5世紀中・後半にはどんな形態であれ、道路が存在したことは明らかである。このような事実は1998年に国立慶州博物館新館の敷地を発掘調査する過程で発見した東西道路で確認された。この東西道路は、道路完工後間もない時点で幅約5m、深さ30～40cmの水路が南北方向に横切つて作られ、この中には4世紀末～5世紀中半に編年される陶質土器片がたくさん入っていた。従って、この道路の築造年代は5世紀中半頃であることがわかるだろう。この道路と直交する南北道路は幅23m以上の‘王京大路’として、今まで確認された新羅時代の道路遺構中で一番幅が広い大型道路である。王京大路は未だに全面的には発掘調査を実施しておらず、一部に限定して確認する線でとどまっているが、新羅王京地域だけではなく韓半島で確認された古代道路遺蹟としては一番規模が大きいものと確認された。この道路を境界として王京が東西に区分されたようだが、従来の左京・右京の区分があつたかどうかはわかりにくい。ただし、王京地域の根幹をなしている道路であることは確実である。

新羅都城の都市計画については早くから多くの研究があった。しかし、当時言及されなかったのが、即ち朱雀大路（南北大路）である。朱雀大路は都城の中央を貫通する位置にあり、国家的には儀式を挙げる場所としての機能が附与された場所であった。従って必ず宮城の正門と連結されて、その路幅も一般の坊間大路を遥かに凌駕する規模であるはずという。新羅都城も、どんな形態であれ、都市計画は行われて、朱雀大路の存在も否定することはできない。ところが、周辺国家の都城制を新羅でそのまま収容したと考えるには、正宮である月城の位置が問題になる。即ち、中国・日本の場合は正宮が北側中央に位置しているが、新羅正宮である月城は朱雀大路が終わる南側に位置しており、その南側には朱雀大路が位置する空間を用意しなかった点である。ここで位置上、城東洞建物址（殿廊址）を正宮として見なければならぬという見解が出るようになって、月城の中央部間を一直線で連結する南北大路である朱雀大路を思い出すようになったことである。そして、この道路は幅120mにもいったら思っている。しかし、1993年度に慶州文化財研究所が城東洞建物址と南古壘地域を一部発掘調査した後、続いて1998年度には仁旺洞善徳女商増築敷地を発掘調査する過程で南北道路が新たに確認され、120m説は修正しなくならなくなった。

即ち、城東洞建物址は2次に架けての調査の結果、南北長さ約93m、東西幅約220mの長方形構造が明らかになった。そして、その西側における南古壘も従来の一部学者らの見解とは異なり、高麗時代遺構ということが明らかになった。ところが南古壘の石築遺構の下では新羅時代の道路遺構（城東洞建物址西側南北道路）が発見された点が注目される。この城東洞建物址西側南北道路は、確認された路面幅が13.4mにもなる大路で、その路面の東側の端から城東洞建物址中心までの距離が110mしかなかった点である。城東洞建物址の東西幅220mの中心部110mの地点が建物址の中央と思われる。それは後ろ側の“殿堂跡IV”と呼称された四方3間の四角形建物が明堂址であると推定されているためである。勿論、建物址が明堂址ではなくても、南側に道路がありそうな場所はこの地点の他にはなく、南北大路の始作地点をこことみなすには異議がない。この場合、南古壘下層で確認された道路の端からこの中央地点までの距離は110mに過ぎないため、坊間大路の幅を遥かに凌駕する幅120mの大路があるという学説は再考するべきだと思われる。しかし、城東洞建物址中心の南側には、月城との間に道路が位置したことは事実であるが、路幅は従来の見解のように、それほど広くなかったと思われる。こうした事実は善徳女商校舎増築予定敷地発掘調査でも確認されて、その幅は10m程度に過ぎなかった。ところが1998年度国立慶州博物館美術館敷地発掘調査で路面幅23mの南北大路、即ち王京大路が発見されて、注目を集めている。

新羅都城の都市計画が、唐の長安城や日本の平城京等、東アジア都城と密接した関聯性を持ったことを考慮すれば、慶州にも朱雀大路が実存しうる可能性は充分にあるが、文献に“朱雀大路”についての言及がなかったことから見て、なかった可能性もありうる。もし国立慶州博物館美術館敷地発掘調査で確認された幅23mの王京大路がその機能を代わった可能性も排除することはできないだろう。

従って、王京の中心をなしている南北方向道路は王京大路であり、東西方向の主な道路は1987年に確認された皇竜寺南門址前の皇竜寺南外廓東西道路のようである。現在まで王京地

域で確認された道路遺構は20箇所余りに到り、その道路は直線形の道路で、砂利と黄褐色粘質土でつき固めて、最上層には磨砂土が敷かれたことが確認された。特に、道路面全体に砂利を敷いた例は新羅のみで発見されており、東北アジアのどこにも発見されていない特異な現象である。

このように、道路の築造が始まった時点が5世紀中半と推定されており、『三国史記』で京都に坊里名を定めたとあるが、炤知王12年（490）に市場を開設して智証王10年（509）に東市を開設した記録から見ても、5世紀後半頃には坊里で行政区域が分けられており、ある程度、都市の面貌を整えた都城構造を取り揃えていたと推定される。

III 王京の構造

新羅王京の規模については次の文献が参考になる。

『三国史記』34巻、雑志3、地理（1）条に

「今按新羅始祖赫居世。前漢五鳳元年甲子開国。王都長三千七十五步。広三千十八步。三十五里。六部」とあり、

『三国遺事』1巻、紀異1、辰韓条に

「新羅全盛時京中十七万八千九百三十六戸一千三百六十坊五十五里三十五金入宅」とあり、
『三国遺事』5巻、避隱8、念仏師条に

「常念弥陀。声聞于城中。三百六十坊十七万戸無不聞声」のように、王都の長さは3075歩、幅は3018歩の規模で、1360坊または360坊であったと言われているが、ここに現れた王都の長さとは幅は大体現在の慶州市中心部を語っていたとみなしても無理はない。ただし、坊の数字が1360坊と360坊のどちらであるかは確実ではないが、現在としては360坊である可能性が強い。

このような記録だけではなく考古学的に調査結果と文献資料を総合して考えた時、新羅王京の都市計画範囲は大略南北5.4km、東西5.3km規模であったと判断される。

一般的に新羅王京の人口を語る時、上記の『三国遺事』で‘京中十七万八千九百三十六戸。。’の記録に従って（1戸当たり平均5～6名いたとすれば）、100万人が住んでいたとみなすこともできる。しかし、中国唐代の長安城に20万戸が居住したことや日本平城京の人口が12万人程度であったことを考えても、『三国遺事』の‘十七万八千九百三十六戸’は戸数ではなく、人口とみなした方がより妥当であると思われる。

1) 宮闕配置

斯盧国から始まった新羅は国家の体制を整えつつ、現在の慶州地域に定着して、恐らく慶州市の南に該当する西南山麓に最初の都市が形成されたと思われる。それは新羅始祖王である朴赫居世居西干と閼英王妃の誕生地である蘿井と閼英井、死後の彼と王妃を始めとした朴氏一族のお墓である五陵が西南山地域にあるためである。そして、何よりもこの地域<昌林寺址>では朴赫居世居西干の宮闕があった事実からもわかる。それだけではなく慶州地域に現存する初期段階の代表的な城郭である都堂山土城が南山北側麓にあったということからも推測できる。

その後、この南山の北東に段々移動しはじめ、月城とその周辺に移り、また皇竜寺西側と月城北西の方へ拡大したと推測される。

新羅初期の宮闕としてその名前が伝えられた場所としては、金城、月城、満月城、明活城がある。金城と満月城についてはその位置問題について意見が多く、論争の対象になっており、明活城は実聖王5年(405)以前に土城として築造された山城を慈悲王18年(475)から炤知王9年(487)まで13年間臨時に滞在した行宮的な性格を呈する山城なので、事実上正宮としたことはない。これに比べて月城は新羅初期から正宮として使用されたことは事実として受けとられる。

月城は記録上から見る時、婆娑王22年(101)春2月に築造されたという。その模様が月のようであるため‘月城’、新月と似ているため‘新月城’とも言われ、15世紀頃宮闕が廃墟になってから半月城と呼称されたこともある。初創期の月城は周囲1,841mの土城として築造され、その周囲に壕字を構築して、南には南川が流れており、天然壕字を成していた。考古学上では、初期段階の城郭は平地の低い丘陵地を利用した立地条件を整えた天然壕字を囲んだ土城として築造されたことが特徴であり、月城もこうした与件を整えている。大略5世紀後半～6世紀前半から月城北と東の一部地域(鶏林、瞻星台、雁鴨池一部地域)に宮城地域が拡大したようで、雁鴨池(月池)が造成される東宮が創建された7世紀中・後半には雁鴨池一帯と現在の国立慶州博物館地域まで拡張され、最後まで宮城としての位置を占めた。

『三国史記』と『三国遺事』には宮闕の建物名称が一部残っているが、雁鴨池(月池)周辺に東宮とこれに所属する思正堂、万寿房、臨海殿、龍王殿等の附属建物があったことのみ確認されたわけで、大部分の殿閣等が月城の土城内にあったか、瞻星台附近にあったかについては明確でない状況にある。ただ、城門としては北門、帰正門、臨海門、庫門、仁化門、玄德門、武平門、遵礼門、南門等の名前が伝えられている。殿宇としては朝元殿、崇礼殿、平議殿、講武殿、瑞蘭殿、同礼殿、樓閣としては鼓楼、鳴鶴楼、帰正(門)楼、日上楼、望徳楼、望恩楼、青陽楼、その他に氷庫、内黄庫等があったことのみが推測されている。

ところが1974年度～1975年度国立慶州博物館が東部洞で仁旺洞の現在博物館がある場所へ移転する前の発掘調査で、正門の前の駐車場敷地では半月形の蓮池遺構が発見され、雁鴨池館周辺でも圓形柱座がある礎石と長台石が露出されたことがあった。そして、正門内側における小さい小山は駐車場敷地で発見された半月形池と連繫された庭園遺蹟とみなすことができ、王宮地域が月城東南側外廓地域へ拡大したと推定された。ところが1998年度及び2000年度に国立慶州博物館内の美術館建物を新築する際に、先行された発掘調査で官庁用だと推定された井戸址2箇所を始めとして道路遺構等が出土し、この地域が月城の範囲内に属する‘月城東南側宮址’であることを確認することができた。特に、雁鴨池館の前の井戸址では人骨・土器等と共に‘南宮之印’と刻印された圓瓦が発見された。新羅で‘南宮’の存在は未だにこの瓦以外には知られたことが全くないため、現在南宮について具体的な事実を知ることはできないが、南宮の存在を否定することはできない状況である。ただし、国立慶州博物館の位置に南宮があったかどうかについてはもっと深い研究が行われた後で可能であると思われる。

このように新羅王京の正宮は月城であり、王京の真中に配置していたことが把握できる。

2) 墳墓、寺刹分布

東北アジアの古代都城制において、王陵と貴族層の墳墓は王京内に造成されず、7里ほど離れた外廓にあるという。新羅の場合も本格的な都市計画が行われた7世紀後半以後に造成された神文王陵、孝昭王陵、聖徳王陵、景德王陵等と貴族層の墳墓と推定された龍江洞古墳、隍城洞石室墳、障山土偶塚等が王京範囲の外における点からみて、このような影響を受けたと思われる。ただ、憲徳王陵のみが東川洞にあって、若干の問題があるが北川の向こう側である琴鶴山麓にあって、坊の範囲を外れた地域としてみなすことができるため、大きな無理はないといえる。

都城地域に分布した新羅時代寺刹数は203箇所と知られている。この203箇所の寺刹の中で30箇所余りが三国時代に創建されたものであり、大部分は正宮である月城に近い平地に位置する寺刹である。これに比べると、統一新羅時代かその前代に創建された寺刹はそのまま存続されたが、平地で民家が既に飽和状態に到っていたため、民家を寺刹に取り替える等の特殊な方法でなくては新たな寺刹を月城と近い平地に創建するのは難しかったと思われる。そして、新羅の寺刹は都城の拡張に従って、王京中心地域から段々周辺山谷地域へその範囲を拡大していったことは予想できる。勿論、このような現象は仏教の教理や寺刹の経済的な与件等とも無関係ではないと思われるが、都城の拡張とも深い関連があったと思われる。

都城地域に分布した新羅時代寺刹数は203箇所であるが、都市計画で整備された王京地域内の寺刹は皇竜寺址、芬皇寺、皇竜寺西側寺址、味吞寺址、九皇洞塔址、九皇洞木塔址、伝衆生寺址、仁旺洞陽地村寺址、仁容寺址、皇福寺址、普門寺址、普門寺址西側寺址、林泉寺址、東川洞寺址、虎願寺址、三郎寺址、奉徳寺址、南巷寺址、興輪寺址、靈廟寺址、巖荘寺址（推定）、奉聖寺址（推定）、曇巖寺址、天官寺址、四天王寺址、望徳寺址等26箇所程度である。

これら王京地域内の寺刹の中で、発掘調査で王京の構造を明確にした代表的な例が皇竜寺址である。皇竜寺址は1930年代に推定したより4倍以上も大きい規模であることが明らかになり、その範囲も確定できるようになった。即ち、1980年代後半から現在に到るまで、皇竜寺址東側墻の隣で建物址と道路遺構、井戸等王京の一面を明らかにすることができるいい資料を得た。皇竜寺址が位置する範囲は南北281m、東西288mであり、これを周辺の坊里痕迹と比較してみると4個のブロックに分けられ、その大きさは大略南北140m、東西140mと推定されるが、皇竜寺址東側墻の隣で発掘調査中である王京遺蹟では1個ブロックの規模が160m×160mであり、20m程度の差がある。そして、道路と排水口の規模によって差がありうると思われるので、現在としては1坊の規模は長さも幅が140m～160mであったと推定される。

結語

新羅の都城制は、中国・日本の古代都城制で見られる定型化された都市計画とは差があると思われる。一例として、新羅にも当時の中国都城制の影響で、城東洞建物址<殿廊址>が創建されたが、新羅では正宮ではない別宮として創建された差がある。また、これを中心にして王京は左京と右京に区分された見解もあるが、現在としては新羅王京での左京・右京の区分はなかったと思われる。その他に高句麗・百済の後期都城における羅城が新羅には存在せず、代わ

りに周囲の山城が代身した点と、王宮の中心に配置された朱雀大路がなかったという差がある。そして、坊の大きさが前代の構造物等を勘案して決定したため、一定した規模ではないという点は東アジア諸国の都城制と大きく違う点である。その理由は一個の国の首都として位置を占めるには平地の面積がかなり狭く、既に古墳、寺刹、貴族の大邸宅等が密集していたため、これを施行することができなかつたものと思われる。

【参考文献】

- 姜鍾元, 「新羅王京の形成過程」, 『百濟研究』 23, 忠南大学校百濟研究所, 1992.
- 金秉模, 「新羅王京の都市計画」, 『歴史都市慶州』, 悦話堂, 1984.
- 金昌鎬, 「古新羅の都城制問題」, 『新羅王京研究---新羅文化祭学術発表会論文集』 16, 新羅文化宣揚会, 1995.
- 金鎬鎬, 『新羅王京の宮城址研究』, 大邱暁星カトリック大学校大学院碩士学位論文, 1997.
- 南時真, 『南古壘, 殿廊址・南古壘発掘調査報告書』, 慶州文化財研究所, 1995.
- , 『鷄林北便ジット, 月城塚字発掘調査報告書I』, 文化財研究所・慶州古蹟発掘調査団
- 文銀晝, 「新羅王京攷」, 『新羅王京研究---新羅文化祭学術発表会論文集』 16, 新羅文化宣揚会, 1995.
- 閔徳植, 「新羅王京の都市設計と運営に関する考察」, 『白山学報』 33, 白山学会, 1986.
- , 「新羅王京の防備に関する考察」, 『史学研究』 39, 1987.
- , 「新羅王京の都市計画に関する試考(上)」, 『史叢』 35, 高大史学会, 1989.
- 朴方竜, 「都城・城址」, 『韓国史論』 15, 国史編纂委員会, 1985.
- , 「新羅都城の宮闕配置と古道」, 『考古歴史学志』 11・12合, 東亜大学校博物館, 1996.
- 申昌秀, 「王京遺蹟発掘に対して」, 『新羅王京研究---新羅文化祭学術発表会論文集』 16, 新羅文化宣揚会, 1995.
- , 「中古期王京の寺刹と都市計画」, 『新羅王京研究---新羅文化祭学術発表会論文集』 16, 新羅文化宣揚会, 1995.
- 吳英勳, 『新羅王京に対する考察』, 東国大学校大学院碩士学位論文, 1988.
- 禹成勳, 『新羅王京慶州の都市計画に関する研究』, 成均館大学校大学院建築工学科碩士学位論文, 1996.
- 尹武柄, 「歴史市慶州の保存に対する調査」, 『文化財の科学的保存に関する研究I』, 科学技術処, 1972.
- , 「新羅王京の坊制」, 『斗溪李丙燾博士九旬紀念韓国史学論叢』, 知識産業社, 1987.
- 李康根, 「新羅統一王朝の宮闕に対する断想」, 『孝峴文化』 2, 慶州大学校孝峴文化編輯委員会, 1996.
- , 「明堂建築からみた韓・中関係」, 『中国美術と韓国美術の係性---講座美術史』 9 特輯号, 東国大学校仏教美術文化財研究所, 1997.
- 李基東, 「王京の繁栄と社会生活」, 『歴史都市慶州』, 悦話堂, 1984.
- 李琦錫, 「韓国古代都市の条坊(坊里)制研究に対する傾向と課題」, 『韓国の古代都市構造と条坊制に対する国際セミナー発表要旨』, ソウル大学校地理教育科, 1997.
- 李相俊, 『慶州月城の変遷過程研究』, 嶺南大学校大学院碩士学位論文, 1997.
- 張順鏞, 『新羅王京の都市計画に関する研究』, ソウル大学校環境大学院碩士学位論文, 1976.
- 鄭良模・姜友邦, 「新築慶州博物館新羅時代遺構1次調査」, 『博物館新聞』 43, 国立中央博物館, 1974.

- , 「新築慶州博物館新羅時代遺構2次調査」, 『博物館新聞』45, 国立中央博物館, 1975.
- 亀田博, 「新羅王京の地割り」, 『関西大学考古学研究室開設四十周年記念考古学論叢』, 1993.
- 東潮・田中俊明, 『韓国の古代遺蹟新羅篇』, 中央公論社, 1988.
- 東潮, 「新羅金京の坊里制」, 『条里制・古代都市研究』15号, 条里制・古代都市研究会, 1999.
- 藤島亥治郎, 『朝鮮建築史論』, 1930.
- 藤田元春, 「慶州の地割」, 『尺度綜考』, 刀江書院, 1929.
- 孫昌武, 「在長安仏寺考」, 『唐研究』2, 北京大学出版社, 1996.
- 王維坤, 「平城京の模倣原型」, 『古代の日本と東アジア』, 小学館, 1991.
- 李浩萍, 「唐朝都城—長安」, 『中国歴代都城』, 黒龍江人民出版社, 1994.
- 斎藤忠, 「慶州に於ける新羅一統時代遺構址の調査—城東里の遺構址—」, 『1937年度古蹟調査報告書4』, 朝鮮古蹟研究会, 1938.
- , 「慶州城東洞遺蹟再考」, 『古代東アジア史論集(上)』, 吉川弘文館, 1978.
- 田中俊明, 「朝鮮三国の都城制と東アジア」, 『古代の日本と東アジア』, 小学館, 1991.
- 井上秀雄, 「新羅王畿の構成」, 『朝鮮学報』49, 朝鮮学会, 1968.
- 諸鹿央雄, 『新羅寺蹟考』, 私家版, 1916.
- 佐藤興治, 「新羅の都城制」, 『文化財論叢』, 奈良国立文化財研究所, 1983.
- 村上四男, 「新羅王都考略」, 『朝鮮学報』24, 1962.
- 和田萃, 「東アジアの古代都城と葬地」, 『古代国家の形成と展開』, 吉川弘文館, 1976.

【要旨】

紀元前57年、慶州に根拠地を構えた新羅は、日々発展して7世紀中・後半に高句麗・百済を征服し、統一国家を形成して935年まで存続した国であった。高句麗と百済の都城は、数回、都城を移転したため、当時の都市構造等を把握するには困難な点が多い。これに比して、新羅の都城は、慶州に継続して留まっております。統一を迎えてさらにいっそう発展し、高麗に引き継がれて東京という名のもとに、手付かずのまま保存された。したがって、韓国古代の都城(都市)遺跡を考察するにあたって、慶州は、重要な位置を占めているということがいえる。

新羅都城の範囲は、現在の慶州市の面積13,284km²に該当する地域であり、条坊制の痕跡は、北辺の北川から南辺地域に該当し、それ以北は北川の氾濫により流失したため、その痕跡を探すのは困難であるが、最近の発掘調査において一部出現している。東辺へは、明活山西側ふもとの普門寺址まで痕跡が残っている。西辺は、西川が境界となり、それ以西は痕跡がなく、南西辺は、鮑石亭を境界として、北辺の羅井一帯まで、東南辺は、望徳寺址と神王文王陵以北まで該当し、大略、南北5.4km、東西5.3kmの規模であったものと判断される。

このような都市計画の成立時期については明確でないが、京都の坊里名を定めたということであるが、昭知王12年(490)に市場を開設し、智證王10年(509)に東市を開設したという文献から見て、遅くと

も5世紀中・後半には成立していたようである。

新羅国に始まった新羅は、慶州市の南側に該当する西南山ふもとに最初の都市を形成し、しだいに南山の北東側に移動し始めて、月城とその周辺に移されており、ふたたび皇龍寺西側と月城北西側に拡大したものと推測される。

新羅初期の宮闕は、金城、月城、満月城、明活城であったようであるが、このうちで、新羅初期から最後まで正宮として使用されたというものは、王京の中心に位置している月城であった。

都城地域に分布した新羅時代の寺刹数は、203ヵ所と知られており、30余ヵ所程度が三国時代に創建されたものであり、大部分が統一新羅時代に造営された。新羅の代表的な寺刹である皇龍寺址とこの寺東辺塀脇の発掘調査においては、建物址と道路遺構、井戸等、王京の一面を明らかにすることができたが、現在では、1坊の規模は、長さと幅が140m～160mであったものと推定される。

結論的に、新羅の都城制は、中国・日本の古代都城制に見られる定型化された都市計画とは差異があると考えられる。一例として、新羅にも、当時、中国都城制の影響により城東洞建物址<殿廊址>が創建されたが、新羅においては、正宮でない別宮として創建された差異がある。また、これを中心として、王京は左京と右京に区分されたという見解もあるが、現在では、新羅王京における左京・右京の区分はなかつたとみられている。その他に、高句麗・百済の後期都城にある羅城が、新羅には存在せず、代わりに周囲の山城がこれに代わったという点と、王京の中心に配置される朱雀大路がない差異がある。そして、坊の大きさが前代の構造物等を勘案して決定したものであるため、一定の規模でないという点は、東アジアの各国の都城制と大きく異なる点である。その理由は、一個の国の首都として位置を占めるには、平地の面積が非常に狭く、すでに古墳、寺刹、貴族の大邸宅がいくつも密集していたため、これを施行することができなかつたものと考えられる。

【コメント】

東 潮

新羅王京の呼称 『三国史記』や『三国遺事』に、「金城」、「金京」、「大京」と記されている。新羅における王京の成立、坊里制の施行時期、さらに明活山城や南山新城などの山城の出現時期などに関連して、新羅王京をどのように位置づけるか問題となろう。

慶州盆地の地勢と王京の立地条件 北川・西川・南川の旧流路の復元問題。南川は新羅時代に改修され、とくに月城周辺は堤防工事もなされ、そこに「月精橋」・「日精橋」に比定される橋梁が存在する。西川は西京極とかかわる。北川は現在、「北宮」推定地の城東洞遺跡の東北部を流れる。また芬皇寺東北側は現在堤防がつくられている。その東側で、苑池や建物が発掘された。したがって北川はそれらの北側を流れていたことはたしかである。昭知王18年(496)の北川の洪水記事などに言及し、現在の北川北側の東川洞一帯を王京城と想定されている。新羅時代の北川、あるいは北川の旧流路の復元的研究は不可欠である。

王京の範囲 東は狼山からさらに東側の普門寺跡まで地割りの痕跡をみとめられているが、